

「モービー・デイク」(ハーマン・メルヴィル) 其の一

十九世紀中葉、アメリカの捕鯨船が世界の海で盛んに活躍してゐた頃の話である。語り手の青年イシュメイルがニューイングランドの捕鯨基地ナンタケット港にやつて来て、捕鯨船ピークオッド號に乗込む事になつた。船長はエイハブと云ふ名の老いたる練達の鯨取りだつたが、前回の航海で「モービー・デイク」なる異名を取る白い巨大な抹香鯨に遭遇し、格闘の最中に片脚を食ひちぎられ瀕死の重傷を負つた。傷が漸く癒えた今、再び航海に赴かうとしてゐたのだが、その胸底には白鯨への憎悪と復讐心とが烈火の如く燃えてゐた。

ピークオッド號はクリスマス・イヴに出港し、大西洋、印度洋、太平洋と、鯨を捕獲しつつ三年に及ぶ航海を続け、遂に日本の太平洋岸沖合でモービー・デイクを發見、三日に互る格闘の末、エイハブは海底深く引摺り込まれ、ピークオッド號も破壊されて沈没、イシュメイルのみが生き残つてこの悲運の物語を語り傳へる次第となつたのである。

以上の如く、このアメリカ最大の小説の筋は至つて單純である。メルヴィルは同時代の E・A・ポオの様に複雑な筋を工夫する類の作家ではなかつた。だが、「雄大な書を生まんとすれば、雄大な主題を選ばねばならぬ」、「幹から枝が生え、枝から小枝がのびるやうに、豊富な主題からは多くの章が生まれる」とイシュメイルが語る通り、單純な筋が擔ふ作品の主題は實に「雄大」かつ「豊富」なのであつて、今回は三回に互つて「モービー・ディック」の「雄大な書」たる所以について語らうと思ふ。

實はエイハブは片脚を食ひちぎられて、苦痛と激昂の餘り、モービー・ディックを己が「肉體的苦痛ばかりでなく、知的・精神的懊惱」の最大の原因と迄信じ込むに至り、これを飽迄も追跡して撃破せんとの狂氣の執念に取憑かれてゐるのだが、然らば彼の「知的・精神的懊惱」の本質とは何か。

ほんの一例だが、それを端的に物語るのが、ピップと云ふ名の下働きの黒人の小僧に寄せるエイハブの思ひである。ピップは生來臆病だつたが、或時、人手が足りぬとて捕鯨ボートに乗込まされ、疾驅するボートから轉落し、大海原に一人置去りにされて、恐怖の餘り發狂し、後に救出されるが正氣を取戻す事はない。さういふピップを見てエイハブは叫ぶ、「おお、凍て

ついた天の神々よ！ この下界を見るがよい。(中略) 汝らはこの薄幸の子を産んで置きながら、棄ててしまつたのだ。(中略) 小僧、おまへはわしの最奥の心に觸れてくるわ」。

エイハブにとつてピップは「天の神々」に非情にも翻弄される人間の悲惨を象徴する存在に他ならなかつた。或時、エイハブは舷側に吊した老鯨の頭部に向つて云ふ、「ああ、頭よ！ 星も砕け、アブラハムも信仰を失ふほどの出来事を見てきたお主でありながら、しかも一言とても語らぬのか！」アブラハムとは「創世記」に出るヘブライ民族の始祖であり、神の命令ならば愛しい獨り子をも平然と生贄に捧げんとする程の鞏固な信仰で有名な人物だが、ピップの悲惨が象徴的に物語る様に、エイハブには「アブラハムも信仰を失ふ」體の非合理がこの世を支配してゐるとしか思はず、さういふ世界の在り様がどうしても納得出来ない。それが彼の「知的・精神的懊惱」の本質であつて、これを要するに、エイハブの狂氣の追跡の背後には「不當然苦難」の意味を求めて神に論争を挑むヨブ以來の精神の傳統が存してをり、作中、白鯨が「ヨブの鯨」と稱せられる所以だが、かかる「雄大な主題」を扱つた作品を読む時程、私には日米の文化の異質性を痛感させられる事はない。

(野崎孝譚、世界の文學セレクション三六、中央公論社)